

---

# 私は町の何でも屋

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私は町の何でも屋

### 【Nコード】

N8934P

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

セヴィーリアの散髪屋フィガロ。彼の日常は。この頃の欧州の散髪屋はとにかく色々な仕事をしていました。

## 第一章

私は町の何でも屋

「じゃあ旦那、頼むよ」

「こつちもね」

「ああ、わかつてるよ」

愛想のいい顔の男が店の客達に応えていた。ここはスペインの港町セヴィリア、散髪屋である。

「髭を剃ってくれよ」

「こつちは髪を切ってくれ」

「宜しく頼むよ」

「すぐにね」

「わかつてますよ。いやあ、今日も忙しい」

彼は洒落た服を着て店の中をあれこれと動き回っている。鋏に剃刀を巧みに操りそのうえで客の髪や髭の手入れをしていくのだった。

その中でだ。彼は店の若い男に言われた。

「フィガロさん」

「何だい、マゼット君」

「頼みが来てますけれど」

その青年マゼットはこうフィガロに話すのである。

「いいですか？」

「何だい？手紙の代筆かい？」

「はい、それです」

まさにそれだというのである。

「それですね」

「まだ依頼が来ているのかい」

「手術の依頼です」

今度はそれだった。

「それを御願いすることです」

「手術っていうと」

「はい、カストラートのです」

男の子を去勢してそれで喉が発育しないようにする。そうしてそのままの声で歌わせる。ナポレオンが禁じるまで欧州の歌の花形であった。

「その手術です」

「わかったよ、じゃあ後でね」

「後で、ですか」

「夜にしよう」

手術はその時だというのだ。

「あれは時間がかかるからね」

「そうですね。とても」

「そう、とても」

また話すフィガロだった。

「今はこつちが忙しいしそれに手紙だよね」

「代筆を御願いしたいと」

「それもしないとね。恋文かな」

「そうだった筈ですよ」

「よし、じゃあすぐに書けるな」

フィガロはそれを聞いてすぐに述べた。恋文の代筆の依頼はかなり多い。だから慣れているのである。そういうことなのであった。要は慣れである。

「仕事が終わればだ」

「すぐにですね」

「そう、散髪の仕事が終わればな」

「わかりました、じゃあお手伝いしますね」

「頼むよ。ただ」

「ただ？」

「手伝って欲しいことがあるんだ」

こつマゼットに言うのである。

「それはいいかな」

「僕にですか」

「実は他にもう一つ依頼を受けているんだ」

彼が言うのはこのことだった。

「もう一つね」

「つていいますと」

「猫を探して欲しいらしい」

「猫をですか」

「そう、モンテス夫人の飼い猫がいなくなっただんだ」

「ああ、あのドラ猫ですか」

マゼットはそれを聞いてだ。すぐに頷いた。

「またいなくなっただんですか」

「綺麗なメス猫を見て何処かに行ったらいいんだ」

「今丁度発情期ですしね」

「だからね」

それだというのである。猫が家出するにはよくあることだった。

「それでなんだ」

「わかりました。あの猫ならすぐに見つけられますよ」

「コツがあるのかい」

「あいつは鰻が好きなんですよ」

こうフィガロに話すのである。

## 第二章

「だからね。それを出しておけばすぐに寄って来ますから」

「じゃあ頼めるかい？」

「わかりました。それじゃあ散髪が終わってからですね」

「頼むよ。ただ」

「ただ？」

「わかつてると思うけれどあの猫は凶暴だから」

彼が今言つのはこのことだった。

「だから注意してね。引つ搔かれたりそういつことがないよつにね」

「わかつてますよ。あの猫はもう何度も探していますから」

「大丈夫だね」

「はい、そうです」

また答えるマゼットだった。

「それは」

「そうか。任せられるか」

「任せて下さい。鰻さえあればいいですから」

マゼットは笑顔で応えてだ。さらに話す。

そうしてそのうえでだ。散髪の仕事を手早くやる。それが一段落してからだ。マゼットはすぐに家の台所に向かいそのうえで鰻を一尾取って来た。

それを見せてだ。彼は言ってきた。

「すぐに行つて来ます」

「頼むよ。僕は今から代筆をするから」

「そつちをですか」

「うん、すぐに書くよ」

既に紙とペンを用意してある。そこにすぐに書いていく。かなりの速筆である。

それを書き終えた頃にはだ。もうマゼットはいなかった。鰻を持

って街に出ていた。その家出した猫を探し出して連れ帰る為である。とりあえず書き終えた手紙を見てからだ。彼は少し休もうとした。しかしだった。

「いるかい？」

「何ですか？」

「散髪を頼むよ」

新しい客が入って来ての言葉だった。

「すぐにね」

「はい、どういう風にしますか？」

「最近白髪が多いから染めてくれ」

そうしてくれというのだ。

「黒にね」

「はい、じゃあ染料持って来ますから」

すぐに店の奥に入りそれを持って来たのであった。

「黒ですね」

「真っ黒で御願いますよ」

客はそうしてくれと話す。

「もうね。黒々とね」

「それじゃあそれで」

「後は」

客は椅子に座りながらさらに話す。

「少し縮れさせたいな」

「縮れですか」

「うん、そうしてくれるかな」

こう話すのだった。

「それで御願いできるかな」

「時間かかりますけれどもいいですか？」

「ああ、いいよ」

客は屈託のない笑顔で応える。

「その間シエスタをするから」

「そうですね、シエスタをですか」  
「あんたもこれが終わってするのかい？」  
「それがその暇もないんですよ」  
「フィガロは困った笑顔で客の言葉に返す。  
「それがね」  
「ないのかい」  
「最近は特に」  
「そうだというのだ。スペインにあってもだった。  
「残念ですが」  
「そうか、忙しいんだね」  
「凄いですよ」  
「こうその客に話す。  
「とても」  
「それはまた難儀だね」  
「かといって夜もですね」  
「仕事があるのか」  
「そうですね。今日も仕事が入っていました」  
「おやおや、それはまた」  
「けれど何か楽しいことは楽しいですよ」  
「それでもこんな話もするフィガロだった。」



### 第三章

「それはね」

「楽しいのかい」

「お金は入りますしそれに」

「それに？」

「こうしてばたばたと動き回るのもいいものです」

「こつ客に話す。」

「何かとね」

「そういうものかい。さて、それなら」

「それなら？」

「散髪を頼むよ」

「彼自身の話になっていた。」

「今からね」

「はい、それでは」

フィガロはこうしてその客の散髪をした。そうしてであった。

それが終わって夕食を食べるとだ。マゼットが帰って来た。身体  
のあちこちに引つ掻き傷や噛み跡がある。何があつたのかは言つま  
でもない。

フィガロはその彼を見てだ。まずはこう言った。

「とりあえず消毒だな」

「消毒ですか」

「そう、水で洗ってそれで強いお酒で拭いておくんだ」

「そうしないと駄目ですか」

「どうも猫の傷は危ないらしいからな」

「だからだというのである。」

「そうでなくても傷口は洗っておかないと危ないし」

「フィガロさんしょっちゅう言ってますね、それ」

「そつだよ。じゃあわかつたね」

「はい、そうします」

マゼットはフィガロのその言葉に頷いた。そうしてだった。

「それから傷口を包帯で巻いてですね」

「それも忘れないでね」

「傷は後が怖いんですか」

「破傷風もそれからみたいだしな」

フィガロははつきりと確信していなかったがそれを察していた。

「だから余計にな」

「わかりました。それじゃあ」

マゼットは一旦店の奥に入って傷口を丹念に洗った。それからその傷口を包帯で巻いて出て来るとだ。彼はあらためて話をするのだ。つた。

「とりあえず猫はですね」

「猫は？」

「しっかりと捕まえましたから」

マゼットはにこりと笑って話した。

「それは」

「そうか。それは何より」

フィガロは彼のその言葉を聞いて微笑んだ。

「それでその猫は？」

「もう飼い主に返しました」

そうしたというのである。

「報酬も頂きましたから」

「そうか、じゃあ万事解決だね」

「何もかも。それじゃあ」

「うん、それじゃあ」

「夜の仕事ですね」

マゼットはそこに話をやったのだった。

「手術ですよね」

「そう、カストラートのね」

まさにそれだというのがのである。

「その手術があるんだよ」

「あの手術はいつもこっさりとしますね」

マゼットは溜息交じりに述べた。

「それも夜に」

「おおっぴらにする手術じゃないだろ」

「だからですか」

「そうだよ。まああまりする手術じゃないし」

それをする数自体は少ないというのがのである。

「けれど」

「けれど？」

「報酬はいいしね」

フィガロはまたにこりとしてきた。

「やらせてもらうよ」

「それでなんですか」

「しかも僕にそれを依頼してくれるってことは」

「それは？」

「有り難いことじゃないか」

「こつも言っているのである。」

## 第四章

「それでなんだ」

「そうですね。それでなんですか」

「そうだよ。頼られたらそれに応える」

「それが散髪屋ですね」

「そういうこと。さて」

ここでまた話す彼等だった。

「そろそろ来るよ」

「わかりました。では用意を」

「頼んだよ」

こうして客が来るのを待つ。そのうえで夜のその手術をこつそりとするのだった。そしてそれが終わってから二人で夕食となった。

パンにそれにソーセージ、それとトマトである。ジャガイモもある。そうしたものワインと一緒に食べていた。マゼットはここでまた話した。

「今日も大変でしたね」

「そうだね、仕事が多いよ」

「しかし楽しかったですね」

「そうだろ？忙しいと何か楽しいだろ」

「退屈が怖くなります」

笑って話す二人だった。

「ただ」

「ただ？」

「フィガロさんどうするんですか？」

こうフィガロに問うのだった。

「それで」

「それでって？」

「結婚はされないんですか？」

問うのはこのことだった。

「それは」

「結婚か」

「フィガロさんいい歳じゃないですか」

「気付けばそうだな。もうすぐ三十だし」

「それならどうですか？そろそろ」

また二人に話す。

「結婚は」

「結婚も何も」

しかしだ。ここでフィガロは話すのだった。

「相手がいないからね」

「相手がですか」

「うん、いない」

こつマゼットに話すのである。

「肝心の相手がね」

「相手っているじゃないですか」

「いるかな」

「いますよ」

また話すのだった。

「それはちゃんと」

「僕を好きな人がいるんだ」

「フィガロさんもてますよ」

彼が全く気付いていないことだった。これはだ。

「例えばですね」

「例えば？」

「ほら、スザンナさん」

「スザンナ？ああ、伯爵夫人の侍女の」

「はい、あの人です」

彼女だというのだ。

「あの人はどうですか？」

「可愛いね。それに性格はいいしおまけにしつかりしている」  
「はい、それじゃあスザンナさんに話をしておきますね」  
「わかりました。それなら」  
そう話してだった。そのうえであった。  
「スザンナさんにお話しておきますね」  
「そうだね。それとマゼット」  
「僕ですか」  
「君もそろそろ相手はいないのかい？」  
フィガロはマゼットに対して話す。  
「それで」  
「もういますよ」  
彼は落ち着いた声で答えた。  
「僕はね。ちゃんとね」  
「誰だい、それは」  
「はい、ツエルリーナです」  
この名前が出て来た。

## 第五章

「今付き合ってます。近いうちに」

「おいおい、それは初耳だよ」

「何時か言おうと思ってたんですがね」

「そうだったのか」

「けれど。フィガロさんより先に結婚する訳にはいきませんし」  
何気に本音も出していた。

「ですから」

「そうか。それじゃあ」

「よし、スザンナさんです」

「会つよ。しかしそれなら人手が加わることになるね」

「奥さんがお家に入ればですね」

「うん、その分助かるかな」

実際のところ結構以上に忙しくてだ。人手も欲しかったのである。

「それじゃあ」

「そういうことですね」

こうしてフィガロはマゼットを介してスザンナと結婚した。スザンナは小柄で茶色の髪を綺麗にまとめた可愛い少女だった。しかも確かに気立がよくしつかりとした性格だった。だが。

フィガロの忙しさは変わらなかった。むしろ、であった。

余計に忙しくなってしまうていた。店の中はまさに戦場だった。

「フィガロ、ちょっと」

「ちょっと?」

「赤ちゃん達が」

「えっ、またなのか」

「そう、またなの」

スザンナが店から出てだ。困った顔で話すのだった。

「またね。おむつが」

「すぐに替えないと駄目か」

「そうしないと駄目だから」

「わかったよ、じゃあすぐに」

「私今手が離せないし」

「洗濯まだ終わらないか」

「ええ、まだなの」

彼女はそれをしていているというのだ。フィガロは丁度店で客の髭を剃っているところだった。その最中に声をかけられてのことだった。

「まだしている最中よ」

「何か洗濯物が急に増えたなあ」

「子供何人いると思ってるの？」

「五人」

フィガロはその数を正確に述べた。

「そして今度」

「また一人できるでしょ」

「それでなんだ」

「そうよ、それで六人よ」

「増えたものだな」

「増えて嫌？」

スザンナはそれを問う。

「子供が増えるのは」

「いや、それはいいよ」

フィガロは笑顔で返すのだった。

「子供は宝だからね」

「そういうことよ。いらないうちか言ったら許さないわよ」

「わかってるよ。それにしても」

「お家の中も御願いな」

「お店も忙しいんだけど」

今度は客の頭を洗っている。実に手馴れた動きである。

「そっちも？」



「ええ、そつちもよ」

すぐに言い返すスザンナだった。

「御願いするわ」

「じゃあさ、スザンナ」

「今度は何？」

「スザンナもお店御願いできるかな」

彼が言うのはこのことだった。

「そちもさ。いいかな」

「ええ、いいわよ」

スザンナの返答はすぐだった。

「勿論よ、それは」

「それならいいよ。じゃあ是非にね」

「そういうことね。じゃあね」

「うん、頼んだから」

「それでマゼットさんは？」

ここで彼の名前も出て来た。

「今日は大丈夫よね」

「ああ、今日ね」

「マゼットさんのお店はお休みよね」

こう夫に問うのだった。家の中からだ。

「だから助っ人に来てくれるって聞いたけれど」

「本人だけじゃなくて奥さんも来るよ」

フィガロは妻の問いに答えた。

「あの人もね」

「ツエルリーナちゃんもね」

「来てくれるよ。安心していいから」

「わかったわ。ただ」

「ただ？」

「出来るだけ早く来て欲しいわね」

切実な願いだった。今の彼女にとっては。

「本当にね」

「実は僕もそう思うよ」

「まあ当然ね」

「そうだよ。今日は特に忙しいなあ」

今度は店の隅で何やら書いている。恋文の代筆だった。

「本当に」

「散髪だけじゃないからね」

「そう、何でも屋」

それだというのだった。

「この街の何でも屋だからね」

「だから大変なのね」

「仕事は多いよ。それに仕事は待ってくれないから」

「しかも次から次に来るしね」

「そうよ。それにお家のこともあるから」

「今までの倍以上忙しいよ」

結婚する前と比べてのことである。それを今心から思ったのである。

「本当にね。凄いよ」

「けれど嫌？」

スザンナがここで問う。

「それは嫌かしら」

「嫌って言われたら」

「そうじゃないでしょ」

「うん、それはね」

違うというのだった。

「嫌だったらとっくに止めてるよ」

「そうでしょ。楽しいわよね」

「人生は色々忙しいから楽しいからね」

フィガロは笑って話した。

「だからね」

「そういうことよ。それじゃあマゼットさん達が来るまでね」

「うん、それまで」

「気合入れて頑張りましょう」

「わかったよ」

スザンナの言葉に笑顔で頷く。そのうえで店の仕事を終わらせてから子供達の相手もするのだった。そんな多忙な毎日を送るフィガロは幸せだった。

私は町の何でも屋 完

2010・6・11

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8934p/>

---

私は町の何でも屋

2011年1月2日21時10分発行